

2021年2月7日主日礼拝

大井バプテスト教会

説教題 『パン種』が大事！」マタイ 16章5～12節

主任牧師 加藤 誠

「イエスは彼らに、『ファリサイ派とサドカイ派のパン種によく注意しなさい。』と言われた」(マタイ福音書 16章6節)。

先月、「信仰とは、心に『三つの窓』を開けること」というお話しをしました。「**天窗**」(神さまにつながり、神さまの語りかけに聞いていく窓)、「**底窓**」(自分自身の特に弱くてダメな部分を見つめる窓)、「**横窓**」(隣り人や社会に開かれていく窓)の『三つの窓』。その信仰の『三つの窓』を私たちの心を開けるために、主イエスは来て下さいました。

大きな困難に行く手をふさがれて光が見えないように思える時にも、「天窗」を開いて神さまの恵みの光を受けていく時、神さまにある希望が見えてくる。そして神さまの恵みの光は私たちの心に「底窓」と「横窓」を開けて、私たちが自分の弱くてダメな部分と向かい合っていく勇気を与え、隣り人と一緒に歩む優しさと力を与えてくれる。聖書の主イエスに出会うとき、私たちの心に『三つの窓』が開けられて、神様の恵みの光の中を歩く幸いに招き入れられるのです。

ところが、弟子たちはなかなか主イエスの言葉が理解できず、しばしばかみ合わない珍問答をしています。今日の箇所はそんな箇所の一つでしょう。主イエスは「パン種」の話をしているのに、弟子たちは「パン」にこだわり、かみ合わないのです。

「パン種」とはイースト菌のこと。パンをつくる時、小麦粉と水と一緒に混ぜ合わせると、パンをふくらませて風味豊かにしてくれます。当時はイースト菌をスーパーで買うことはできませんから、「パン種」は各家庭の台所に代々保存されていました。日本でいうなら「ぬか床」のようなものかなと思います。家ごとに「パン種」の状態は異なり、パンの出来上がりや風味が異なってきます。元気で生き生きとした「パン種」ならばふっくらと風味豊かなパンが焼けあがりますが、腐って元気を失った「パン種」ならばパンはふくらまず美味しく焼けません。

それと同じように主イエスが教えてくださった「神の国の福音のパン種」ならば、小麦粉は少ししかなくてもよくふくらんで美味しいパンが焼けるけれど、ファリサイ派とサドカイ派の「パン種」ではパンは美味しく焼けない。だからあなたがたの心の中にファリサイ派やサドカイ派の「パン種」がないかどうか、よく注意しなさい…と主イエスは言われたのでした。

ファリサイ派の「パン種」とは「律法主義」の考えです。律法に書かれている通りにこだわり、律法で禁じられていることはダメ。「神さまがお嫌いなものは神さまから遠ざけるべし」という潔癖主義でもありました。

またサドカイ派の「パン種」とは「数と力の論理」を大切に考える考えです。数字で可能性を判断する現実主義。サドカイ派の人びとは、宗教者でありながら政治権

力にすり寄り、その保護を受けることで力をふるっていました。

それに対して、主イエスは「神の国の福音のパン種」こそ、人を豊かに生かす力であることを示されたのです。それは神の恵みの力を信じ、喜び、希望を見ていく生き方です。

「信仰の薄い者たちよ、なぜ、パンを持っていないことで論じあっているのか。まだ、分からないのか。覚えていないのか。パン五つを五千人に分けたとき、残りを幾籠に集めたか。また、パン七つを四千人に分けたときは、残りを幾籠に集めたか」(8-10節)。

弟子たちは「パンを持っているか否か」にこだわりました。つまり、食べ物を持たない人たちが大勢あふれているという大きな現実課題の前に、どれだけ「その問題を解決するだけの力をもっているか」にこだわったのです。それは、この現実世界を生きる私たちのごく普通感覚と言ってもいいでしょう。「毎日、食べるパンが必要。パンがなければ何も始まらない」。それは私たちの皮膚感覚に近い、体に染みついた考え方です。

しかし「五つのパン」と「七つのパン」という、パンの奇跡を主イエスが起こされたのは、いずれも人里離れた寂しい場所でした。「パンを買いに行くこともできないし、そもそもそんなお金がない。俺たちには無理！」と弟子たちは考えました。サドカイ派が大切にした「数と力の論理」からみても可能性ゼロ。宗教家でありながら現実主義者の彼らは、そんな現実を前に神に祈っても意味がないと考えたことでしょう。またファリサイ派の人たちは、食事前の「清めの水」が用意できない場所で食事をするのは律法に禁じられている！…と反対したことでしょう。ファリサイ派の人たちは、神さまの御旨を律法の中にだけ小さく押し込めてしまっていたのでした。

けれども、主イエスはサドカイ派の「パン種」でもファリサイ派の「パン種」でもない、「神の国の福音のパン種」の生き方を示されます。律法が禁じているかどうかではなく、「神は愛！」「神の愛を分かち合って隣り人と一緒に生きる！」「神の愛を分かち合うためなら、神は必要なものを必ず備えてくださる！」という、神の国の福音に生きる信仰を何よりも第一にされました。

それだから、弟子たちがもっていた「五つのパンと二匹の魚」、「七つのパンとわずかな魚」という、数千人のお腹をすかせた人の前には何の役にも立たないような小さな小さなパンと魚を、神さまの恵みの光を受けて祝福し、喜ばれたのです。人々と一緒に賛美の祈りを神さまに向けてささげられたのです。そのとき、彼らの目の前の現実は変えられました。夕暮れの迫る人里離れた寂しい場所は、神さまの恵みを分かち合う礼拝の場所に変えられ、感謝と賛美の祈りが広がって行った時、人びとの間に笑顔が広がっていったのです。

「まだ、分からないのか」(9節)、「どうして、分からないのか」(11節)。

鈍く固くなってしまっている私たちの心に、今日も「信仰」の「三つの窓」を開けるために語りかけておられる主イエスの言葉を聞いていきたいのです。